

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00579

研究課題名(和文) 自然言語における定形節のフェイズ性に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A theoretical and experimental study of the phasehood of finite clauses in natural languages

研究代表者

三上 傑 (MIKAMI, Suguru)

大東文化大学・外国語学部・講師

研究者番号：60706795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自然言語における定形節のフェイズ性に関して、Miyagawa(2010,2017)が提唱するStrong Uniformityと素性継承システムのパラメータに基づく理論的枠組みの下で新たな分析可能性を探るものである。具体的には、Narita(2011)で主張された「収束性(Convergence)」に基づくフェイズの定式化を採用し、それを当該理論的枠組みに組み込むことで、主語卓越言語と焦点卓越言語間における定形節のフェイズ性に関するパラメータ化という新たな見方を提示した。そして、日英語の諸構文の分析を通して、その妥当性の検証作業を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで生成文法理論研究で広く受け入れられてきた「命題性(Propositionality)」に基づくフェイズの定式化を破棄し、新たに「収束性」に基づく定式化を採用し、それをMiyagawa(2010,2017)の理論的枠組みに組み込むことで、定形節のフェイズ性が言語間でパラメータ化されるという独自のかつ創造的な試みを行っており、その意義は大きい。また、研究課題を実施する中で、結果としてアプローチの再考・修正を余儀なくされたものの、Miyagawaの理論的枠組みの下で適切に捉えられる見通しをある程度立てることができたという点においては、意味のある研究であったと考えている。

研究成果の概要(英文)：This study explored a new possibility of phasehood of finite clauses in natural languages. More specifically, incorporating Narita's (2011) formulation of the phase in terms of convergence into Miyagawa's (2010,2017) theoretical framework of the strong uniformity and the parameterization of feature inheritance, it proposed that the phasehood of a finite clause be parameterized between Subject-prominent languages and Focus-prominent languages. It also examined the adequacy of the novel parametrization by explaining various syntactic phenomena in English and Japanese.

研究分野：英語学

キーワード：定形節 フェイズ性 収束性 Strong Uniformity 素性継承システムのパラメータ化 主語卓越言語 焦点卓越言語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論では、Chomsky (2000, 2001)以降、Multiple Spell-Out モデルが採用され、統語構造はフェイズ単位で構築され、その都度、音声体系と意味体系へ転送されると想定されてきている。そして、このフェイズの定義をめぐっては、Chomsky (2000, 2001, 2004)による「命題性 (Propositionality)」に基づく定式化が広く受け入れられてきている。この定式化に従うと、完全な項構造を有する v^*P に加えて、時制や事象構造を含む CP、すなわち定形節がフェイズを形成することになる。

この定形節のフェイズ性に基づき説明がなされる言語現象に、英語における繰り上げ操作の適用可能性に関する定形節・非定形節間の非対称性がある。繰り上げ操作は一般に A 移動の一種として分析されるが、フェイズを形成しない非定形補部節内の主語要素は、その節境界を越えた繰り上げ操作の適用が可能である。それに対して、定形補部節はフェイズを形成するため、その内部の主語要素が節境界を越えて A 移動できないと説明される。

しかしながら、日本語に目を向けてみると、Ura (1994)が定形節境界を越えた従属節主語の A 移動である「超繰り上げ現象 (Hyper-Raising)」の存在を指摘するなど、定形節が必ずしもフェイズを形成していないのではないかと示唆する事例が観察される。また、言語の通時的な側面を見ても、古・中英語では現代英語と異なり、定形節境界を越えた統語操作の適用を示唆する事例の存在が指摘されている (cf. Allen (1980))。したがって、「命題性」に基づくフェイズの定式化と、それに伴う自然言語における定形節のフェイズ性の妥当性をめぐっては、共時的・通時的にも未だその決着を見ていない状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、先に述べた学術的背景を踏まえ、自然言語における定形節のフェイズ性に関して、Miyagawa (2010, 2017)が提唱する Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の枠組みから再検討し、その理論的・経験的意味合いを明らかにすることを目的とした。具体的には、Narita (2011)が主張する「収束性 (Convergence)」に基づくフェイズの定式化を採用し、それを当該理論的枠組みに組み込むことで自然に導かれる主語卓越言語 (Subject-Prominent Languages) と焦点卓越言語 (Focus-Prominent Languages) 間における定形節のフェイズ性に関するパラメータ化という言葉の新たな見方を提示した。そして、繰り上げ操作や抜き出し操作の適用可能性に関する日英語間の共時的変異や英語の通時の変化を統一的に説明することで、この仮説の妥当性を立証することを企てた。

3. 研究の方法

本研究では具体的に、1)当該理論的枠組みの精緻化と研究仮説の設定、2)主語卓越言語における非定形節の非フェイズ性に関する考察、3)焦点卓越言語における定形節の非フェイズ性及び焦点節のフェイズ性に関する考察、4)当該理論的枠組みのさらなる理論的意味合いの考察と新たな分析可能性の検討という四段階に分けて実施した。

1) 当該理論的枠組みの精緻化と研究仮説の設定

本研究課題は、2019 年度より現代日本語における「超繰り上げ現象」を分析対象とした自身の研究が基となっている。本研究は、その考えを基本的には踏襲し、Narita (2011)が主張する「収束性」に基づくフェイズの定式化を Miyagawa (2010, 2017)が提唱する Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の理論的枠組みに組み込むことで、定形節のフェイズ性が主語卓越言語と焦点卓越言語間でパラメータ化されるとする新たな見方を提示した。この研究仮説に従うと、以下の【表 1】にまとめられるように、フェイズを形成する節が両言語タイプで異なると予測されることになる。

【表 1】両言語タイプにおけるフェイズを形成する節のタイプ

	主語卓越言語	焦点卓越言語
継承される素性	Phi 素性	焦点素性
フェイズを形成する節タイプ	定形節	焦点節
フェイズを形成しない節タイプ	非定形節	非焦点節

現代英語をはじめとする主語卓越言語では、C から T へ Phi 素性が継承される。節のフェイズ性 (CP のフェイズ性) の決定にはその継承された Phi 素性が関与するため、Phi 素性一致が確立されている定形節が必然的にフェイズを形成することになる。それに対して、現代日本語をはじめとする焦点卓越言語では、焦点素性が C から T へと継承され、節のフェイズ性を決定する。その結果、その焦点素性を介した一致関係が確立されている焦点節がフェイズを形成することになるため、当該言語タイプでは定形節・非定形節という節タイプに関係なく、焦点素性を介した一致関係が確立されていない場合には、定形節であってもフェイズが形成されないことになる。なお、この研究仮説は、定形節のフェイズ性に関する言語間の相違をめぐり Miyagawa の理論的

枠組みの下で想定される一つの分析可能性であり、継承される素性のタイプに基づき、節のフェイズ性自体にパラメータを設定することで、それを捉えようとするものである。

2) 主語卓越言語における非定形節の非フェイズ性に関する考察

3) 焦点卓越言語における定形節の非フェイズ性及び焦点節のフェイズ性に関する考察

先に述べた研究仮説の妥当性を立証するために着手したのが、主語卓越言語における非定形節の非フェイズ性と、焦点卓越言語における定形節の非フェイズ性及び焦点節のフェイズ性に関する実証的研究である。前者については英語の受動虚辞構文 (Passive Expletive Construction) を、後者については日本語のいわゆる「主語条件 (Subject Condition)」を分析対象として取り上げた。しかしながら、後者に関する実証的研究を進める中で、当該アプローチの当初想定していなかった問題点や、これまでの自身の研究で得られた知見と相容れない部分が明らかとなった。

4) 当該理論的枠組みのさらなる理論的意味合いの考察と新たな分析可能性の検討

そのような中で新たに着手したのが、本研究課題が採用する、一連の Miyagawa 論文で提案された理論的枠組みのさらなる理論的意味合いの考察と、それに基づく新たな分析可能性の検討である。先に述べたように、本研究課題は、定形節のフェイズ性をめぐり、当該理論的枠組みの下で想定される分析可能性の一つという位置づけで、節のフェイズ性自体にパラメータを設定することで言語間の相違を捉えることを試みるものであった。しかしながら、当該アプローチの問題点やこれまでの自身の研究との矛盾を解消するために、新たに別のパラメータを設定するという発想の転換を図った。具体的には、当該理論的枠組みの下で主語の構造的位置に関するパラメータを提案した。そして、その適用可能性を検討することで、定形節を超えた統語操作の適用可能性も含めて、より多くの事例を統一的に捉えられるのではないかとという仮説を新たに設定し、その実証的研究に着手した。

4. 研究成果

本研究による主な研究成果は、以下の二点にまとめられる。

1) 研究仮説の実証: 主語卓越言語における非定形節の非フェイズ性

英語の受動虚辞構文をめぐっては、これまで、存在文の構造に基づく分析と受動文の構造に基づく分析の二つが提案され、それぞれの分析の妥当性を示す議論が展開されてきた。その一方で、互いの分析を取り組む形での包括的な議論は十分になされてこなかった側面がある。本研究では、両先行研究の知見を掛け合わせ、当該構文が両方の構造の組み合わせだったハイブリッド構造をなすとする新たな分析を提示し、その構文が有する多くの特性が統一的に捉えられることを立証した。

なお、当初の計画では、当該構文の通時的変化を本研究仮説の下で説明することで、定形節がフェイズ性を示さない焦点卓越言語の段階から、定形節がフェイズ性を担うようになる主語卓越言語への変化過程を捉えられるのではないかとという構想をし、研究に着手した。しかしながら、研究を進める中で、当該構文が当初想定していた以上に、理論的・経験的に非常に重要な意義を有し、とりわけ現代英語に関しては、押さえるべき特性が多数存在することが明らかとなった。その結果、先行研究とそこで論じられているデータの精査等に、当初想定していた以上の時間を要してしまったため、今回の研究課題では現代英語を中心に分析することに変更した。ただし、スウェーデン語への応用可能性についても検討できたことで、当該構文の通時的変化のみならず、共時的変異を統一的に検討する足掛かりを築くことができたのではないかと考えている。

2) 新たな分析の可能性の提示: 自然言語における主語の構造的位置に関するパラメータ

本研究課題を実施する中で明らかになった問題点や、自身のこれまでの研究で得られた知見との矛盾を解消するため、Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化に基づく Miyagawa (2010, 2017) の理論的枠組みの下、自然言語における主語の構造的位置に関するパラメータを新たに提案した。それに基づく、継承される素性のタイプの違いにより、主語が占める構造的位置が両言語タイプ間でパラメータ化されることになる。すなわち、現代英語などの主語卓越言語では、C から T へ Phi 素性が継承されるため、主語はその素性を介した T との文法的に一致に伴い、必然的に TP 指定部を占めることになる。その一方で、日本語などの焦点卓越言語では、Phi 素性の代わりに焦点素性が継承され、Phi 素性は C にとどまり続けることになるため、主語が焦点性を有していない場合には、Phi 素性を有する C との間で文法的な一致を起こすために主語が CP 指定部へ移動するのに対し、焦点性を有している場合には、その焦点素性の照合のために TP 指定部へ移動することになる。本研究課題では、この仮説の妥当性を立証するために、日本語のいわゆる「主語条件」が示す特性を原理的に説明することを試みた（なお、当該現象については、本研究課題を構想する段階では、定形節のフェイズ性に関するパラメータ化についての本研究仮説を名詞句のフェイズ性 (DP フェイズ) へ応用することで説明できるのではないかと想定していた)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Suguru Mikami	4. 巻 64
2. 論文標題 A Hybrid Structural Approach to the Passive Expletive Construction in English	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 STUDIES IN ENGLISH LITERATURE	6. 最初と最後の頁 124-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Suguru Mikami	4. 巻 39-1
2. 論文標題 Review: Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond Ed. by Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen, Mouton de Gruyter, 2018, vi+499pp.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 82-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Suguru Mikami	4. 巻 38
2. 論文標題 Review: Leung, Alex Ho-Cheong and Wim van der Wurff (eds.) The Noun Phrase in English: Past and Present Amsterdam: John Benjamins 2018, 229 pp.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代英語研究	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Suguru Mikami
2. 発表標題 The (In)applicability of the Subject Condition in Japanese: Parameterization of Feature Inheritance and Counter-cyclic Focus-movement
3. 学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL) 17（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 三上 傑
2. 発表標題 言語変異と言語変化：統一的アプローチの可能性を探る
3. 学会等名 大東文化大学語学教育研究所2022年度研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三上 傑
2. 発表標題 生成文法理論における日本語研究の「これから」：より説明力の高い言語理論の構築を目指して
3. 学会等名 大東文化大学語学教育研究所2021年度研究発表会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関